

ラボの世界

THE WORLD OF LABO

～特別号～

世界的なCOVID-19の蔓延により、ラボ国際交流センターの夏の交流活動は中止せざるを得ないこととなりました。

つきましては、例年6月に発行しております「ラボの世界」夏号も、掲載すべき中国や北米、ニュージーランドとの交流活動の中止のため、紙面の冊子としては休刊とさせていただきます。

しかしながら、今春、35周年の記念の交流となるはずだった北京市月壇中学からはマスク5,000枚と応援メッセージ、そして上海外国語大学附属外国語学校の生徒さんから応援メッセージをいただきました。また、ラボOBであり、作家の神山典士氏からも励ましのメッセージをいただきましたので、あわせて弊公益財団のウェブサイトに掲載することといたしました。

国際交流は中止となりましたが、このようなときだからこそ、互いに励ましあいながら将来に希望をつないでいきたいものです。

では、応援メッセージをお読みください。

公益財団法人 ラボ国際交流センター
理事長・間島祐介

..... も く じ

- page **1** ラボOB・神山典士氏からのメッセージ **「地球を包みこむ社会力を」～アキラくんへの手紙**
- page **6** **ラボ・中国青少年交流35周年** 記念掛け軸紹介
- page **7** 35周年によせて **中国からのメッセージ**
- page **9** 本多豊國氏の **墨絵掛け軸紹介**



神山典士 (こうやま・のりお)

ノンフィクション作家, 1974 年ラボ国際交流参加

☆…ラボ国際交流 50 周年の記念図書を書くために、今夏のラボ
北米交流参加取材する予定をしていた作家の神山典士さんから
みなさんへ激励のメッセージをいただきました。

地球を包みこむ社会力を アキラくんへの手紙 ～ラボの5つの秘密の力～

「悲しいだろう
みんな同じさ
同じ夜をむかえてる
風の中を 一人歩けば
枯れ葉が
肩でささやくよ」

アキラくん、きみのことを考えていた夜、ラジオから
偶然、この歌が流れてきました。

これはずいぶん古い歌手の古い歌なんだけど、アキラ
くんの心情を歌っているような気がしませんか？ ぼく
がアキラくんくらいの年齢で国際交流に参加した頃、こ

の歌手はぼくの「王様」でした。何度この歌になぐさめ
られたことか。あの日からもう 50 年近くたつのだけれ
ど、ぼくの王様がいままたアキラくんのためにこの歌を
うたってくれている。そう思うと、涙が出てきました。

準備を重ねてきた今年の夏のラボ国際交流が、新型コ
ロナウイルスの世界的な蔓延のせいで中止になってし
まった。目に見えないウイルスに対して、なすすべのな
い人間たち。

アキラくんだけではなく、だれにぶつけていいのかわ
からない悔しさをもてあましながら、ひとり長い夜を過
ごしているラボっ子が全国に大勢いるはずです。

正直に言って、ぼくはきみたちに語るべきことばもな
い。なぐさめのことばもない。せめてぼくがアキラくん
に語れることがあるとすれば――。

じつはぼくもまた、今年の夏の大きな目標をなくしま
した。ラボ国際交流の半世紀の歩みを書くために、ぼく
は去年の暮れの黒姫ウインターキャンプから取材を続け
ています。ほんとうなら今年の夏、アキラくんたちといっ
しょにアメリカに行って、きみたちのホームステイのよ
うすを取材して本に書く予定でした。それはラボにとっ
て 49 回目の国際交流の旅。それも中止になってしまっ
て本の出版も延期になりました。ぼくもまた、いいよう
のないさびしさを抱えているのです。だからせめてその
取材の途中経過を、きみに伝えたいと思います。

アキラくんへ。アキラくんといっしょに海を渡る予定
だったすべてのラボっ子たちへ。

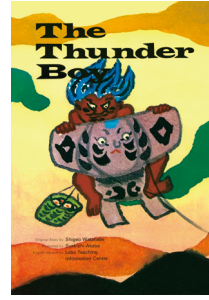
もしかするときみたちは、「歴史に残る世代」になるの
かもしれないと思いながら――。

※

ラボの国際交流は「なぜ」半世紀も続いてきたのか？
そんなことを考えたことはありませんか？ 今回の本



国際交流参加時の
神山氏



SK1『かみなりこぞう』

は、その「なぜ？」をテーマにいろいろな人にお話をうかがっています。取材を重ねるなかで、その理由には「5つの秘密」があるのではないかと。そんな仮説を立ててみました。

ラボが生まれたのは1966年。前の東京五輪が開かれて2年後のこと。大阪で万博が開かれるのはその4年後のことですから、五輪から万博へ。当時の日本ではとにかく「国際化」が大きなテーマとなっていました。

でも当時、子どものための英語教室なんてほとんどなかった。だってこの頃、日本人で海外に行く人はいまの約13分の1の年間約150万人。海外から日本にやってくる外国人も約40分の1の約66万人。まだ成田空港もなく、羽田空港も小さくて、仕事以外で外国に行くなんて夢のまた夢。せめて子どもには将来その夢を叶えてほしいと思っていた親たちが、「英語」にひかれて子どもをラボに入れたのです。

でもそのラボは、とっても変わった教室でした。英語は確かに習うのだけれど、世間がイメージする教室にはない、5つの「秘密」があったのです。アキラくんはあたりまえと思うかもしれないけれど、あらためてラボを見てみるとふしぎなことに満ちています。

まずひとつ目は、英語を教える「先生」がいないこと。

チューターは学校の先生とは違います。先生は子どもたちに「成績」をつけて競争させるものだけれど、チューターは成績をつけない。そもそも成績なんてものはラボにはない。「じょうずに素がたりができたからきみは100点」なんて、だれもいわないでしょう。

さらに学校の先生は学年ごとに代わるけれど、チューターは長いときはラボっ子が0歳から大学を卒業するまで、20年以上もずっと面倒を見ます。これも大きな違いです。

かといってチューターは親でもありません。先生も親も「上から」ものをいってくるけれど、チューターは「ナナメ」からラボっ子たちを優しい視線で（時に厳しく）見ていてくれる。そんな存在、ほかにはいないでしょう。そこにラボの最初の秘密があるのです。

ふたつ目は、ラボっ子が集まる「パーティ」です。

学校は年齢ごとの輪切りのクラスだけれど、ラボ・パーティでは幼稚園から大学生まで、ときには10歳以上も差がある異年齢の子どもたちがいっしょに活動します。家では兄弟姉妹が少なくても、パーティでは大きなお兄さんお姉さんも小さな弟も妹もみんないっしょ。お兄さんお姉さんは年下の子どもの面倒を見ることで成長し、年下の子はお兄さんお姉さんのやり方やかっていい姿を見ながら育っていく。先生になにかを教わるのではなく、自分たちで鍛えあう。競争するのではなく、お互いを認めあいながら集団をつくる。

だから「学校はつまらないけどラボは楽しい」という子がたくさんいるでしょう。そこにはそんな秘密があります。

そして3つ目の秘密。それはアキラくんも大好き（かな？）「テーマ活動」です。

ラボが生まれた当初数年間、いま「ラボ・ライブラリー」と呼ばれる物語テープはありませんでした。チューターは絵カードなどを使って、「I go to school. I go to church.」なんていう英語を子どもたちとくり返していました。

最初に実験テープが生まれたのは1969年1月。SK1『The Thunder Boy かみなりこぞう』。その物語と出会ったときの子どもたちの生きいきとした表情を、佐賀県の村田樹美子チューターは忘れられないといいます。

「この物語のテープをかけたなら子どもたちは最後まで聴かないと気が済まないんです。おもしろいおもしろいといって、ことばもどんどん覚えていく。英語だなんて思わずに耳からはいったことばをそのまま覚えていたんだと思います。驚きました」

当時、村田チューターは、自宅で英語塾とラボとふたつの教室を開いていました。ところが塾の生徒もラボの物語テープを聴くと喜んで、はなれなくなってしまった。英語を教えられているのではなくて、自分から聴きたがっている。そう思った村田チューターは、塾をやめてラボ



ラボ・サマーキャンプ

一本にしたそうです

つまり物語の魅力をいち早く見つけたのは、大人ではなくアキラくんのようなラボっ子だったのです。

でもすぐにいまのような表現活動が生まれたわけではありません。最初は物語を表現するのは紙芝居だったり指人形だったり絵カードだったり。劇形式で演じる場合でも、衣装を着たりお面をかぶったり、小道具があったのです。

ところが物語を聴きこんでいくうちに、変化が現れました。

——この物語のテーマ（作者や登場人物の気持ち）はなんだろう？

そういうことをみんなが考えるようになって、いつの間にか衣装やお面は消えていき、「テーマ活動」という、ふしぎなことばが残った——。だれが「テーマ活動」ということばをラボのなかに定着させたのか、それはどんなに調べても明確な記録はありませんでした。たぶんこれも、いろいろな表現を試すなかでチューターや子どもたちのなかにしぜんに定着したことばなのではないか——、ぼくはそう思っています。

でも、大人たちから与えられたものではなく、子どもたちが発見したものだからこそ半世紀たったいまも輝いている。そこにラボの3つ目の秘密があります。

そして4つ目はキャンプ。

黒姫のラボランドは1971年、ラボが生まれて5年目にできていますが、その前からラボは、富士山の麓の高原の小学校などを借りてキャンプを開いていました。

——10代の子どもの成長には、大自然の下で自立を促すキャンプ活動が必要だ。

ラボは、最初からそう考えていました。

世間の人たちは、「なんで英語教室がキャンプ場なんて持ってるの？」とふしぎだったようです。いまだって自前のキャンプ場を持っている学習塾なんてないでしょう？ でもラボは、10代の子どもたちには、外国語＝英語を教えるだけでなく、子どもから大人にむかって自立

することがたいせつだ、と考えていました。

だってラボが生まれたときからかかげているテーマは、「ことばがこどもの未来をつくる」。

生み出したかったのは「英語がじょうずな子ども」ではなく、ことばを使ってたくましく生きる子どもたちの「未来」だったのですから。

その未来の主人公は、この地球を舞台に生きいきと活躍する子どもたちです。成長して社会に出たら、国境を越えていろいろな国の人びとといっしょに活躍して、この世界を平和で豊かなものにする存在であってほしい。

だから「早く実現したい」と考えていたのが「10代が海を渡る国際交流活動」。それは大人になるための「自立＝ひとりだちへの旅」として、1972年に実現しました。でもラボが企画した「ひとりぼっちのホームステイ」に、世間は驚いたようです。

佐賀の村田チューターは、はじめてラボっ子を国際交流に送り出す前に、その子の中学校の校長先生から電話がかかってきたことを覚えています。

「村田先生、〇〇ちゃんがアメリカに行くというのはほんとうですか？」

「ええ、行きます」

「何人でホームステイするのですか？」

「当然ひとりです」

「えっ、ひとり？ ほんとうですか？ では□□中学の生徒だとはいわないでくださいね」

「なぜですか？」

「事故があったら困るからです」

それくらい、ひとりきりで海外の家庭に入るホームステイは常識を外れたプログラムだったのです。でもなにをいわれても、チューターたちは子どもたちのことを心配しつつも平気でした。なぜならラボっ子は、突然海を渡るわけではありません。幾重にも重なるラボのプログラムを経験して、相当に鍛えられていたからです。

もちろん当時、海を渡るのは経済的にもたいへんです。当時の参加費は約35万円。社会人の初任給が約5万円だった時代ですから、いま考えたら140万円くらいかっ



第1回ラボ国際交流



『大人になったピーター・パン』
(田島信元著／アートデイズ)

たか。それでも多くの親は子どもたちを国際交流に出したいと思った。それは当時の日本人にとって「海外」は大きなテーマであり、子どもたちに託す「夢」だったからです。

こうして生まれたラボの「国際交流」が5つ目の秘密です。それは、ただ子どもたちに海外経験をさせればいいのか、英語ができればいいというプログラムではありませんでした。

ラボっ子たちの成長をナナメから見つめるチューターがいて、異年齢集団のパーティで鍛えられて、他者と出会う物語に浸るテーマ活動があって、その上で自立をもとめる国内キャンプがあり、さらにことばで未来を切り開く国際交流がある。

この5つに込められた「夢の厚みと重み」を力として、子どもたちはひとりぼっちで異文化に飛びこんだのです。

だからこそこの交流は半世紀も続いたのだ——、ぼくはそう思っています。

アキラくんはまさにその渦中にいるわけだけれど、どう思いますか？

※

そんなラボの活動が半世紀続くなかで、どんな子どもたちが育ったのか。アキラくんの先輩たちはどんな大人になったのか。ラボをテーマに長く観察研究をされている、筑波学院大学の元学長で教育社会学者の門脇厚司先生は、その結果をこう語っています。

「ラボのメソッド（教育方法）には厚みがあります。そこで育つラボっ子は、生き抜く力ともいえる「社会力」を身につけていく。それがラボの魅力だと思います」

先生が、やはりラボを長く研究されている発達心理学者の田島信元先生といっしょに書かれた『大人になったピーター・パン』（アートデイズ）のなかには、ラボのOB・OGたちのこんなことばが紹介されています。

「ラボ活動が人生に与えた影響は、民族や年代に関係なくだれとでもものおじすることなく接することができるリーダーシップや協力性を習得したこと。世界をもっと見てみたい、世界の第一線で仕事がしたいと強く思っ

ていること」。

「ラボで得たのは英語などの言語能力ではなく、仲間とになにかつくりあげること。つくりあげるために本音で議論し、信頼関係を築けたこと」

「ラボには家庭や学校ではできない世界がたくさんある。年齢も性別、ことばの違いを超えた仲間とのつながり。世の中にはいろいろな考えの人たちが共生していて、考えが合わなかったり理不尽な目にあうことも多い。でも人と人のつながりをたいせつにし、自分の糧にできている」

門脇先生はラボ活動のなかで子どもたちが身につける力をこう表します。

- ・人間が大好きで、どんな人ともうまくコミュニケーションがとれる人間
- ・ほかの人の身になり立場にたって物事を考えられる人間
- ・物事に対して常に前向きに取り組もうとする人間
- ・人類社会の将来に常に思いを馳せながら行動できる人間、等々。

それらをひっくるめて先生は、「社会力のある人間」と表現します。その社会力とはなにか？ 先生はこう語ります。

「ラボでは多くの人や物語の登場人物たちと関わります。関わるなかで相手を思いやる気持ちが養われる。目の前にいる人だけでなく、地球の裏側に住んでいてまだ出会ったことのない人のことも考える。自分の生まれる前の世代のことも、自分の後の世代のことも思いやる。いま地球温暖化問題で世界的に発言しているスウェーデンのグレタさんはそういう力を持っている。そんな力を社会力と呼びます」

アキラくん、どうだろう。きみはいま中学1年生だけれど、ラボ活動を通して、こういう「社会力」を身につけている途中ということになるんじゃないだろうか。

今年、国際交流にはいけなかったけれど、ラボのメソッドを通してきみにはチューターがいる。パーティがある。テーマ活動もある（いまはオンラインラボかな？）。キャ

ンブもいろいろ経験してきた。なにより日本中に、同じ活動を展開してきたラボの仲間がいる。アメリカやほかの国にも、国際交流を楽しみにしていた同世代の子どもたちがいる。そういうなかで社会力を鍛えている最中だね。

一方でいま人類は、目に見えないウイルスという敵に対して、「互いを思いやり、人に感染させない」ためにさまざまな活動を自粛しています。その思いやる気持ちは家族、地域、学校、国をカバーして、世界へ、そして「まだ出会ったことのない人たち」へと広げなければなりません。まさに「社会力＝地球を包み込む想像力」が試されているのです。

アキラくん。こうやって考えると、この夏に海を渡れなかったことは悲しいけれど、きみたちはラボで育んだ社会力を使って、まだ見ぬホストファミリーのことを「思いやる」最初の世代になるかもしれない。たとえば今年の夏はオンラインでつながって、リモートホームステイなんていう手もあるかもしれない。

そのうえで将来、アキラくんが実際にホストの家を訪ねることができたら、その交流は2倍にも3倍にも価値のあるものになるんじゃないか？ アキラくんたちだけでなく、このコロナをきっかけに世界中の人びとが「地球を包みこむ想像力」をもてたら、これまでとは違う新しい社会が生まれるんじゃないか？ 大きな挫折や悲しみを経験したからこそ、アキラくんたちはこれからの社会で活躍する最初の世代の主人公になれるんじゃないか？ だからきみたちは「歴史に残る世代」だと、ぼくは思っているのです。

※

コロナウイルス感染を防ぐために人と人がつながることができなくなったり、いうまでもなく人類は、史上最大の危機を迎えています。

このコロナはいつまで続くかわからないし、一端収束しても、変異したウイルスや別のウイルスが繁殖する可能性も高いともいわれます。

それを防ぐためには、これまでのように資源欲しさにジャングルを乱暴に開拓したり、エネルギーをじゃんじゃん使って大気中にCO2をまき散らしたり、多くの人が都会に集まったりする生活は変えないといけない。人類は新しい日常（ニューノーマル）を生み出さないと存在していけないのではないかな。まだだれにも予測できないし、なにが正解かもわからないけれど。

でも仮に新しい時代がきても、人類はこれまでの繁栄の基礎となった「共感力」だけは失ってはいけないと、

京都大学学長で霊長類研究家の山極寿一先生が語っています（毎日新聞4月28日）。それは言い換えればラボが培ってきた「社会力」といってもいいはずです。

だからアキラくん、社会力を使ってきみが成長したときの地球の姿を想像してみてください。どんなふう人間はつながっているのか。日本という国の姿をイメージしてみてください。どんな社会に生きていきたいのか。

アキラくんはどんな大人になりたいですか。どんな家族をもちたいですか。どんな仕事がしたいですか。どんなふうになかに生きていきたいですか——。

冒頭に紹介したぼくの王様の歌はこう続きます。

**「やっとな人に なれたからって
涙がでたんじゃ 困るのさ
やっぱりぼくは 人にもまれて
みんなの中で 生きるのさ」**

今度会ったらいっしょに歌おう。オンラインでもいいけど、できれば肩を組みたいね。みんなで集まれるようになったら、やっぱりソングバードだな。

アキラくん。きみは何の歌が好きですか？——。

※引用

「どうしてこんなに悲しいんだろう」 作詞・作曲・歌 吉田拓郎

ラボ・中国青少年交流35周年

ラボ・中国青少年交流35周年で今春中国に贈呈する予定だった水墨画の掛け軸



ラボ・中国青少年交流30周年で北京月壇中学より寄贈いただきました

郭沫若氏の詩より（右側の、以前に北京でいただいた書。左側の絵の掛け軸については5ページでご紹介）

黄河之水通江戸 珠穆峰連富士山

黄河の水は江戸に通じ 珠穆峰（チョモランマ）は富士山に連なる

北京市月壇中学の校長先生からのメッセージ

(※原文です)

~~~~~  
尊敬する間島祐介理事長及びラボのみなさん

尊敬するボランティアの先生の方々

尊敬するホストファミリーの皆様及び参加者の生徒さん

3月という日本の桜が咲いている最中の季節に、中国北京市月壇中高等学校を代表致しまして、遠方より挨拶させていただきます。感謝・祝賀・残念・期待・激励が含まれている複雑な気持ちで、2020年はきっと忘れがたい一年となると思います。

### ○ 2020 年のありがたいこと：

2020 年 1 月、新型コロナウイルスによる肺炎は中国武漢を中心とし、急速に中国そして全世界に拡大していったので、死亡者は 1 万人も超えたそうです。それで、人類はまさに運命共同体だとしみじみ感じました。中国政府の果敢な対策及び日本も含まれている海外のご支援のおかげで、明らかに成果を収めました。今、中国の経済と生活活動は少しずつ元に戻りつつです。この間、日本政府それに日本人の素早いご援助、ご協力とご支持をいただき、本当にありがたいと思います。特に寄付されたマスクのダンボールに書いてある「山川異域、風月同空」というメッセージ、日本の街頭で武漢のために募金を行った日本人の少女の姿、給料の中から 5,000 円も出して中国に寄付した与党の議員さんたちは無数の中国人を感動させました。一方、日本でも今新型コロナウイルスが蔓延しているようですが、中日両国は手を携えて、きっと一時の困難を乗り越えることができると信じております。我が校もできるかぎりのことをなんとかしたいと思います。

### ○ 2020 年のめでたいこと：

日本ラボ国際交流センターと我が校が友好交流（民宿交流）35 周年に当たり、双方が互いに協力し、さまざまな困難を乗り越えました。リレーのようにすでに 34 回の青少年民宿交流を展開し、積極かつ深遠な影響を与え、大きな成果を収めました。この機会に、35 年間にわたる中日青少年民宿交流のために懸命し、巨大な成果を収めた古賀 泉様（1988.05. 就任）、鈴木裕生様（1995.11. 就任）、時本 学様（2006.05. 就任）、平野昌和様（2010.05. 就任）、間島祐介様（2017.05. 就任）などの歴代理事長に対し

て、崇高な敬意を表します。1973 年 5 月 26 日日本ラボ国際交流センターが日本外務省に財団法人と認定された後、2012 年 4 月 1 日に再び日本内閣に公益財団法人と認定され、2017 年 7 月 6 日にラボ国際交流センターが日本外務大臣賞を受賞し、表彰されました。誠にありがとうございます。

### ○ 2020 年の遺憾：

2020 年初春に現れた新型コロナウイルスが世界中に広がり、日本を含め、すでに 180 国家に影響を与えました。世界中の人々が皆コロナウイルスの防衛戦に参加する中、私達も以下の決定を下しました。2020 年 3 月 30 ～ 4 月 4 日に開催する予定の第 35 回民宿交流活動と第 35 周年記念活動は、一時的にキャンセルあるいは延期するしかありません。こんな事は何十年も出会ったことがなく、すごく残念で、もし今後チャンスがあれば、再開したいと考えています。

### ○ 2020 年の期待：

疫病がなくなり、生活ももとに戻り、再び楽しく生活を過ごせようと期待しています。第 35 回民宿交流活動と 35 周年の式典活動のこの後の展開も期待しています。

### ○ 2020 年の激励：

友好を万代に残し、消えない友情がここにありますように。大度な心境で世界を読み、余裕のある生活を過ごしますように。江戸まで繋ぐ黄河の水、エベレストと仲良く富士山。

静かなこの春；曇っている春；鳥歌の聞こえない春；胡蝶の舞いが消えた春；花が咲かない春；緑がなくなった春の柳；この春に落ちた大雪が梅の花を困らせたが、時間が経てば、やがて悪き全てが遠ざけてゆく、残るのが美しさのみ！

最後に東京オリンピックがうまく行きますように。また 2022 年北京冬季オリンピックにまた会いましょう。

2020-03-22 張文生

※北京市月壇中学には、弊公益財団にマスクを 5,000 枚寄贈いただきました。いただいたマスクは有効に活用すべく、日本赤十字社東京都支部等に贈らせていただきました。

## 北京市月壇中学の日本語の先生がたからのメッセージ

(※原文です)

1. 同じ世界同じ戦い、私たちは運命共同体です (呉 敏)
2. 同じ試練に立ち向かう labo の皆さん、感染は一時のもので、ともに乗り越えましょう (李 璋)
3. ウイルスは交流を妨げますが、35 年になる絆を深めます。また、大山の頂上でお会いしましょう (嚴 東淑)
4. ウイルスで一時離れても、35 年間の付き合いで結ばれる心はひとつ (李 冬陽)
5. 各国は共に一つの世界にある。中日は一衣帯水で、人的交流が活発であると同時に、自然災害や様々な危険を前に苦楽を共にしている。月壇中学と LABO との友情は相手のことを我がことのように感じ、苦難を共にする友情の表れではないでしょうか。両方が手を携えて前進し、つぎの 35 周年へと期待しておる (黄 敏)
6. この世界には愛に欠けることはありません。同じ空の下にいるみなさん、東京オリンピックで、北京万里の長城で、また、会いましょう (陶 延妍)
7. 我々違う場所にいてもいつまでもラボのみなさんと心が繋がるものです。いままでのご支援どうもありがとうございます。これからも共に心強くウイルスに向かって戦い合って 35 年の交流を一日も早く迎えましょう (劉 丹青)
8. ラボの皆さん、35 年間にわたった中日の繋ぐ手、繋ぐ思いはきっと今を乗り越える大きな力になるでしょう。再会の笑顔を期待しています！ (徐 睿)
9. ラボの皆さん、私たちは家に引きこもっていますが、心の絆はさらに強くなりました。疫病は一時的なものだが、友情は幾久しく続くもの。共に難局を乗り越えていけるようお祈りいたします (衣 美華)
10. ウイルスで隔てられていますが、心配し合う気持ちが変わりません。ウイルスに負けない信念を持って一緒に頑張りましょう (孫 瑶)

## 上海外国語大学付属外国語学校高校 3 年生 郭さんからのメッセージ

上海外国語大学付属外国語学校 高校 3 年 郭 天月

(※原文です)

ラボの皆さんへ



上海外国語学校の郭です。中高併せて六年間、私は三回もラボっ子を迎えたことがあります。日本の友人たちと一緒に楽しい時間を過ごせて、ラボの送別会の司会も務めました。皆さん、私のこと覚えていませんか？

今年、本校とラボの交流が締結三十五周年を迎えます。長い間、私たちはあらゆる困難を克服してきて、中日両国青年の交流を続けてきました。おかげで、中国と日本の若者がお互いに理解し合い、私たち中国の学生にとっては、初めて日本人の親友ができました。

しかし、このような素晴らしい意味を持つ今年では、全世界で新型コロナウイルスが問題になっています。こんな状況の中、残念ながら安全を考慮して、今年は往年のように活動できなくなりました。今回の交流を希望していた方にとっては悔しいでしょう。

実は私も新型コロナウイルスの影響で、留学していた日本の学校の卒業式に参加できなくなりました。これは一生の心残りになりますが、私はこう想いました。私は友人たちと、この学校とこの街を愛しているからこそ、責任を持つべきです。もし外出を控えるという小さな行動で、大切な人と街の安全を守ることができれば、この選択には甲斐があります。

ですから、残念ながら今年は新しいラボっ子の皆さんを迎えなくなりましたが、みんなで力を合わせれば、ウイルスに勝つことができると信じています。私は心から、ラボっ子たちとまた会える日を楽しみにしています。そして、皆さんが無事に乗り越えられるように安全と健康を願います。

2020 年 3 月 16 日

5 ページの左側の掛け軸の水墨画は、当公益財団評議員でもある、水墨画家の本多豊國氏によるものです。

『雲龍二山図』という事で描きました。黄河を金龍に見たてて、金龍が巻き起した雲が4ヨモランマ(中国)と富士山(日本)をひとつに包みこんでいます。  
又、金龍は『黄龍』と呼ばれるので、黄河にちなみました。龍のツノを4本にしたのは、5本だとその龍は、天王、天帝を暗示し3本だと地方の権力者を想像することもあるので、尊厳の意をこめて4本にしてみました。どうか、皆さんが、楽しんでくれたら嬉しいです。

頓首草々  
本多豊國  
4.5.2020

